

真山茂樹：第14回国際珪藻シンポジウム開催に携わって

1996年7月13日(土)の午後、大学の研究室で第14回国際珪藻シンポジウム(略称:14th IDS)のため、企業宛に寄付金依頼書を作成している時のことであった。宿直所からの内線電話が鳴り、至急文教大の出井さんに電話をせよとの連絡が入った。公衆電話から彼の自宅へ電話をすると、沈痛な口調で彼が

「真山、小林先生・・・亡くなった」

「どうして・・・」

私にとって一生涯忘れられないことのないIDS開催のストーリーが、この時、新たに始まったのである。

1994年イタリアで開催された13th IDSにおいて、1996年9月の日本開催が決定された。それ以来コンピーナーである小林弘先生は生物、地学、応用の各分野の珪藻研究者からなる実務委員会を組織し、準備を行っていたのであった。会期直前に起きた、誰も予期しなかった突然の心筋梗塞による逝去の知らせは、その日の内に実務委員(秋葉文雄、出井雅彦、加藤和弘、木下新一、谷村好洋、寺尾和明、南雲保、真山茂樹、柳沢幸夫、渡辺研太郎:敬称略)に衝撃的に伝わった。

この日まで2年近くにわたり実務委員は何回となく会合を重ね、分担しながら準備を進めていた。そのためIDS自体は何とか開催できるであろう、と予測していたものの、14th IDS会長を欠いた国際学会が、いったいどのようなものになるかは誰も想像がつかなかった。会期は9月2日から9月8日までで、あと一月余りしかない。小林先生に替わる人を立てるべきとの助言が外野からは聞こえてくる。E-mailやFaxを使い、実務委員間で連絡を取りながら可能な選択肢を探るが適当な答えが見つからない。結局8月半ばになり、ようやく結論にいたった。それは、IDSの日本への招致を最初に表明して以来、4年余りにわたって開催に努力を注ぎ込まれた小林先生の功績を消さないためにも代替りの代表者は立てない。IDSの進行は今まで苦勞を共にしてきた準備委員が前面に立っておこなう。小林先生が招聘したIDSであることを表すためにも、先生の思い出コーナーを設けるというものであった。

14th IDS受付初日である9月2日は瞬間にやってきた。会場となった国立オリンピック記念青少年総合センターは、新宿から小田急線で2つ目の参宮橋駅より徒歩5分。表に立てば副都心の高層ビル群に手が届く。しかし振り向けば明治神宮の蒼き森が延々と広がる抜群の環境である。口頭発表、ポスター展示、レセ

プションはすべてセンター内の国際交流会館を使用した。本年2月にオープンした、広いガラス窓に大理石風の柱が並ぶ清潔感あふれる国際派指向の建物である。受付はこの建物の廊下で行った。前日より実務委員の他に多くの日本人若手・中堅の研究者が実行スタッフとして加わり、国外からの研究者の対応に当たった。

国際交流会館2階のロビーには、"Memories of the late Dr. Hiromu Kobayashi"の標題の下、花に囲まれた小林先生の遺影、数々の思い出の写真、略歴、出版論文リストを飾った。またポスターボード脇の机にはTVモニターを置き、先生のNHK教育TV出演時、および日本珪藻学会での講演時のビデオを連日上映した。

2日の夜はウェルカムドリンクパーティーを開いた。なごやかにパーティーは始まり、途中、国際珪藻学会の会長であるR. Ross氏を紹介し、スピーチをお願いした。氏は小林先生の死を惜しむと共に、14th IDSが成功裡に終わるよう期待を述べた。

欧米から遠くはなれた日本での開催のため、当初は今までの大会の2~3割減の参加者数(150人)を予想していたが、実際は予想を大きく上回り、31ヶ国から223人(うち研究者は203人、国外94人、国内99人)が参加した。国外から最も参加者数が多かった国はロシアで14名、ついでドイツとアメリカが10名、韓国が8名、イギリスとカナダが6名の順であった。

宿泊は会場内にある出来たてのD棟(バス・トイレ付きシングル、ビジネスホテルなみのサービス、1泊4000円)と3年前に竣工したA棟(バス・トイレ共用シングル、ユースホステル様のセルフサービス、1泊2300円)を使用した。A棟では10部屋ごとに係りの日本人を決め、シーツの取り替えなどの世話をを行った。宿泊した海外研究者には値段の安さとそれに勝る内容、また対応が好評であった。

食事も計画当初は随分心配をした項目の一つであった。しかし、会期が夏休みを過ぎた9月であったため、センター利用者が少なく食堂の2階を貸切ることができた。そのため食券は不要となり、一般とは別の料理を出せた。毎食バイキング形式を採用したため、インドから参加した戒律の厳しいベジタリアンにも、なんと空腹感を抱かせることなく食べてもらうことができた。酒類は珪藻学会会員から大量に現品が寄付されたため、それで会期中をまかなうことができた。

3日の朝は国際会議室でオープニングが行われた。最初に、小林弘先生の弟子の一人として、真山が先生の逝去の報告、先生の人物紹介などをし、代行して歓迎の辞を述べた。ついで、先生の奥様である玲子夫人と令嬢の美咲さんが、日本語と英語で今まで受けた厚情に対し感謝の念を表し喝采を浴びた。最後に2年間準備を共にしてきた実務委員の年長としてJAPEXの秋葉氏が、小林先生に代わって歓迎の辞と開会宣言を行った。この後、同会議室でD. G. Mann氏の発表を皮切りに午前中は口頭発表が続いた。午後は2階の展示室でポスター発表が行われた。このスケジュールは5日を除き7日まで続けられ、合計145題(口頭37, ポスター118)の発表がなされた。内容的には生物関係の発表が78, 地学関係61, 応用関係6であった。また3日と4日の夜には分類学, 生物層序学, 新光学器機に関するワークショップが研修棟で盛況に開かれた。

5日には富士・箱根方面へエクスカーションを行った。曇天の日にもかかわらず富士山五合目では2回雲の晴れ間から山頂を見ることが出来た。山中湖で採集をおこなった後、大湧谷を見学し、3台のバスは夕方7時前に会場へ戻ってきた。参加者に感想を聞くと、誰もが満面笑みを浮かべ「日本の自然は素晴らしい、感激した」と答え大満足の様子であった。

会期中行われた好評な企画の一つに南雲氏のアイデアによるバザーがあった。これは日本人参加者に家の押入で眠っている和風の品物を供出してもらい、それを廉価で売ったのである。扇子、色紙、凧、熨し袋といったものから半纏、着物まで、いろいろなものが毎日ロビーに置かれ、外国からの参加者はそれを手に取り、楽しみながら「土産もの」を買っていった。

6日の夜には国際珪藻学会の総会があり、次回IDSは1998年にオーストラリアのパスで、さらに2000年はギリシャのアテネで開催されることが決まった。

7日夜にはバンケットを国際交流館のレセプションホールで開いた。極地研の渡辺(研)氏が司会を勤め、最初に東学大の石川先生が、ついでR. Ross氏が挨拶を行った。藻類研究所の福島博先生が乾杯の音頭をとられた後、賑やかに食事と談笑が始まった。4ヶ所のテーブルには料理が並び、天ぷら、そば、焼き鳥の屋台が後ろに並んだ。持ち込みの酒類も許されたため、飲食物の量は十分あったと思われる。宴の途中で、西欧、東欧、アジア、北米、南米から代表5人により、鏡割りを行い枀酒を振る舞った。立食形式のため、会場内を自由に歩き回り各国の人と友好を深めることが出来たのは収穫であった。最優秀学生ポスター賞が東大緑

植の加藤(和)氏によって発表され、関西外語大の渡辺(仁)先生によって授賞者2名に賞金各1万円が手渡された。この後バンケットは佳境に入る。諏訪の永沼、飯島両先生による地元の山の神様へ捧げる歌とも踊りとも儀式とも言える?余興を皮切りに、84歳の年齢をまったく感じさせないR. Ross氏のハンカチを両手



にステップも軽やかな見事なダンス、国ごとの参加者による歌の合唱などが次々に飛びだし、会場は終始、拍手と歓声で包まれた。バンケットの最後は日本の伝統、三本締めで終了したが、興奮の渦がその後、会場外の飲み屋で、そして宿泊棟の庭で深夜まで延々と続いたのは言うまでもない。

8日の朝からは秋葉、地質調査所の柳沢、群馬自然史博の田中(宏)、湘南短大の吉武各氏を中心に企画された3つのオプションツアーがあった。どれも十数人のこじんまりとしたツアーで、スタッフの丁寧な世話により大変暖かな雰囲気ツアーであったと聞く。

今、14th IDSを振り返ると、嵐の如く吹き去っていった夏の2カ月がまるで夢のように思われる。小林先生が会期におられなかったのは誠に残念なことであった。しかし30名を越す若手・中堅の日本人研究者の自主的な活動と協力は素晴らしく(実際、いつどの場所に行っても、必ず何人かのスタッフがスタンバイし、きめの細かい活動を行っていた)これにより、本シンポジウムは成功裡に終わったものと確信している。先日、海外より礼状がe-mailで届いた。大変短いものであったが、そこにはこう書かれており感激した。

You should be proud!

Your colleagues should be proud!

Japan should be proud!

(184 小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学生物)